映画史上最高最大の宇宙探検旅行！

「2001年宇宙の旅」空想と事実

「2001年宇宙の旅」はフィクションの所産だ。不朽の映画が持つあらゆる要素を含んだ未来の壮大な冒険の物語だ。この映画で描かれる事件が、どうして起こり、どんな方法で達成されたか、それを一九六八年の目で見ると、全くの空想のように思える。しかし、「2001年宇宙の旅」は、事実に基づいた作品だと言って過言ではない。シネラマの画面に展開されるすばらしい物語は、製作・監督スタンリー・カブリックが長年にわたって、大気圏学、宇宙航空学、生物学、サイバネティックス、天文学の領域を熱心に調査研究した結果であり、また共同脚本家アーサー・C・クラークの半生にわたる準備の成果である。「2001年宇宙の旅」に描かれるすべてのことは、つぎの三十年間に起こり得ることであり、宇宙についての世界一流の権威者の過半数が、この映画でのでき事が、つぎの世紀の初めに起こるだろうと見ている。

1．映画での空想

宇宙のはるか遠くを飛ぶ旅客宇宙船の廊下をスチュアーデスが食事の盆を持って歩いている。突然彼女は難なく壁面を歩きはじめ、さらに、まっさかさまになったまま天井を歩いてドアを通り抜ける。

科学的事実

二〇〇一年には、地球と月との間に旅客宇宙船が定期的に運行されるだろう。その宇宙船は現在の飛行機と同じように広々とし、快適にできている。全然違うことは、ここには重力が少しもないことだ。宇宙船の内部には圧力が加えられ、普通に空気を呼吸し、普通の服装でいられるが、無重力の中で、スチュアーデスが一歩踏み出そうものなら、彼女は空中で回転し行動の自由を失ってしまう。それを簡単に解決するのは粘着剤のベルクロだ。その粘着剤を靴の底と床に着ければ、普通の行動をすることができる。一九六六年六月、合衆国の宇宙飛行士ジャイン・サーナンはカプセルを出て有名な宇宙遊泳を行なった。彼は地球から二〇〇マイルの上空で、手袋とジェミニ九号のカプセルに着けたベルクロによって、自由に行動することができた。

2．映画での空想

探検隊長デイブ・ボウマン（キア・デュリア）は、完全な宇宙服と酸素と圧力装置なしで、一つの宇宙船から他の宇宙船へ、真空の空間で緊急移乗をする。

科学的事実

完全な真空の中では、人間は瞬間といえども生存できない、と最近まで一般に信じられていた。しかし、最近合衆国空軍の実験によって、宇宙飛行士が破裂するという説は粉砕された。数匹のチンパンジーや犬を、最高二分間まで真空状態の中に入れたが、その動物の全部が悪い影響を受けることなく生きながらえた。「2001年宇宙の旅」で宇宙飛行士ボウマンは、十秒間で宇宙艇から宇宙船に乗りうつるが、今までは人間は十秒間も真空中で生存できるわけがないと思われていた。

3．映画での空想

木星に向かう九カ月間の旅行中、五人の乗組員のうち三人が人工的な完全な冬眠状態にされる。

科学的事実

スタンリー・カブリックが相談した多くの科学者のひとりに、ニューヨーク大学医学部の解剖学教授で、人工的冬眠の世界的権威のオーモンド・G・ミッチェル博士がいる。博士がある科学財団からの補助金を受けて行なった研究によって、人間を長期間冬眠状態にすることが可能であるばかりか、近い将来に実現し得るという結論に達した。

4．映画での空想

HAL9000は超知能的コンピューターであり、それ以前のコンピューターによってのみ作られる感受性の鋭敏なコンピューターである。HAL9000は惑星間の宇宙船「ディスカバリー」のあらゆる機械を制御する。それは計画し、宇宙船のコースを維持し、ディスカバリーの数千に及ぶ機器の状態を監視し、その他の多くの活動を自動的に行なう。それと同時にHAL9000は、宇宙飛行士たちと会話する。ということは、HALは聞くことができるし、見ることができることだ。宇宙船全体に設置した電子光学的「目」によって、彼はどんなことでも見のがさない。彼は文字どおり考えることができる。事実HAL9000は、人間と同じように、感情的な反応を示すのだ。

科学的事実

コンピューターはまだ幼児期だ。開発されてからわずか十二年だが、「モデルA」は、すでに人間にまさる機能を発揮している。マサチューセッツ工科大学の数学教授マービン・ミンスキ博士によれば、「三十年後には我々は、人間に匹敵する知能を持つ機械を作り出すだろう。人間と同じ知能的な機械ができれば、それは必ず、あらゆる面で意識があるもののように活動するに違いない。二〇〇一年までには、諸君の言うことを理解し、諸君と会話するようなコンピューターを作ることは容易だ。ケンブリッジのトリニティ・カレッジのジョン・グッド博士は、スタンリー・カブリックと相談したひとりだが、彼の信念によれば、「あと三十年以内に超知能的コンピューターが作られるであろう……超知能的コンピューターというのは、あらゆる知能的活動を、どんな人間よりも多少は巧みに行なうことができる機械のことだ」

そうだとすると、今からわずか三十年後の地球の生活はどんなことになるだろう？　われわれの大部分は、自分の目でそれを見るだろう。それは、つぎの事実を示すものだ、「現在地球に住んでいる人々の大多数は、二〇〇一年を見るまで生きられる」

スタッフ

監督・製作……スタンリー・カブリック
脚　本……スタンリー・カブリック
　　アーサー・C・クラーク
撮影監督……ジョフリー・アンスワース
全特殊撮影効果の考案・監督……スタンリー・カブリック

キャスト

ボウマン……キア・デュリア
プール……ゲイリー・ロックウッド
フロイド博士……ウィリアム・シルベスター
月監視人……ダニエル・リクター
HAL9000……ダグラス・レイン
スミスロフ……レオナード・ロシター
エレナ……マーガレット・タイザック

2001年われわれはどのような宇宙の驚異に直面するか！ 宇宙への冒険と探検の雄大なドラマ！

ストーリー

今から400万年前、地球には人間の祖先である猿が、小さな群を作って住んでいた。彼らの頭上には大空が広がり、彼らの周囲には広大な原野が続いていた。

ある朝、眠りからさめた彼らは、近くに不思議なものを発見した。それは黒い記念碑のようなもので、原野に端然と立っていた。一体誰が建てたのか、明かに自然のものと違う幾何学的な形体が、猿たちにも異様に思えたらしく、彼らは遠巻きに眺めていたが、中には、腕を伸ばして、そっとさわってみるものがいた。

すると、この黒石板が猿たちの進歩を促したかのように、彼らは道具を発見した。

それは、地上に横たわる野獣の骸骨から抜き取った一本の骨に過ぎなかったが、それを握った猿は、前よりずっと強くなり同族の他のグループに襲われた時には、これを振るって彼らを撃退することができた。

黒石板の手引きで、一たび道具を発見した人間は、進歩の道を突き進んでやまなかった。人間猿が、たわむれに空高くほうり投げた一本の骨は、やがて宇宙船にまで発展し続けたのである。

そして2001年。われわれは、すでに、月に基地や植民地を持ち、地球と月との間には、宇宙ステーション5を中継地として旅客宇宙船が定期に通っている。

今しも宇宙船オリオン号が、地球から宇宙ステーション目指して飛んで行く。オリオン号は、地球と宇宙ステーション5との間を往復するフェリー・ボートで、地球の大気圏を通るので翼を持っている。

しかし、こんどの旅では、オリオン号の客はアメリカ宇宙航空局のフロイド博士（ウィリアム・シルベスター）唯一人だ。彼はある秘密の任務で月へ向っているのである。そして、アメリカのケープ・ケネディ空港を飛び立ってから、約1時間で宇宙ステーション5に着いた。

この宇宙ステーションは、赤道の上空を1,800キロの高度で地球を回っている。宇宙で組立てられたもので、車輪のような形をし、ゆっくりと自転している。もともと、ここは無重力だが、回転によって起こる遠心力のおかげで重力感が与えられ、われわれは地球上と同じ状態でいられる。

フロイド博士は、しばらく広いロビーで休憩し、他国の旅行者と話をしたり、テレビ電話で自分の家族と通話したりした後こんどは、宇宙ステーションと月とを結ぶ宇宙船エアリーズ号で月に向った。そして2日後には、月のクラビウス火口にある月基地に到着した。

エアリーズ号が、ゆっくり、地上の発着台に着陸すると、発着台は、同船をのせたまま地下の巨大な気密室に下がって行く。そのため、乗客は宇宙服を着ないで地下の基地に降り立つことができる。

このクラビウス基地は、月の南極よりにあるので、地球は沈むことなく、いつも地平線の少し上空に、満月の50倍以上もの明るさで輝いている。

フロイド博士は、基地の科学者たちと会議を持った後、彼らと一緒に、ムーン・バスで、ここの北方にあるティコ火口に向った。

博士の秘密の任務というのは、ティコ火口で堀り出された不思議な物体を調査するためだった。

博士たちが発堀現場で見たのは、例の黒石板だった。400万年前、人間がまだ地上に現われなかった頃、地球を訪れた宇宙の何者かが月にも現われて、名刺代りにこの記念物を残して行ったのだ。

21世紀の科学者たちは、かっての猿のように、黒石板の前に立って、じっとそれを見詰ていた。中にはそっと手を伸ばしてそれに触れてみる者もあった。

黒石板は、木星の方向に絶えず強力な電波シグナルを送っていた。これが発堀されたのも、その電波のためだった。やがて夜明けの太陽の光りが、黒石板の頂上をかすめた瞬間、かん高い金属音が鳴り響いて、科学者たちは思わず耳をおさえ、その場に居たたまれない思いにかられた。

宇宙のある生物がここに黒石板を建てたもので、電波シグナルが送られる先きに彼らがいる。これが科学者たちの結論だった。そして14ヵ月後、黒石板の謎をとくため、原子力宇宙探検船ディスカバリー号が、地球から8億キロ離れた木星に向って飛びたった。

宇宙探検船ディスカバリー号は、長さが210メートル。先端が球形で、その上部半分にコントロール室、乗組員の居室などがあり、宇宙ステーションと同じように、ゆるやかに回転して重力感を作り出している。球体の下半分は格納庫で、1人乗り宇宙艇が数台格納されている。宇宙艇は、調査や修理のため本船の外に出る時に用いられ、作業用のマジック・ハンドを持っている小型の宇宙船である。

宇宙探検船ディスカバリー号には、5人の科学者が乗組んでいた。うち3人は、目的地に着いて彼らの手が必要になるまで、人工冬眠カプセルの中で眠っていた。脈拍も呼吸もゼロに近い状態なので、酸素、食料、エネルギーが節約できる。したがって、船内で活動しているのは、隊長のボウマン博士（キア・デュリア）とプール博士（ゲイリー・ロックウッド）の2人だった。

彼らのほかに、もう1人、最も活動的な乗組員がいた。コンピューターHAL9000だ。これは最高度のコンピューターで、時には過ちをおかす人間に代って、宇宙船の隅々まで監視していた。少しでも異常があれば、修正修理など適当な処置を、即座に、適確に指示する役目を一手に引き受けていた。しかも、自由に会話ができ、思考力や感情さえ持つスーパーマンのようなコンピューターだった。

ディスカバリー号が木星を目差して順調な旅を続けている時HAL9000は恐ろしいことを思い立った。

ある時、HALは、突然、アンテナに不調な所ができ、やがて完全な故障になるだろう、と言い出した。このアンテナは、地球と絶えず連絡を保つために必要なもので、船外にあった。

そこで、プール博士は、1人乗り宇宙艇でディスカバリー号の外に出て、HALの指示通り、アンテナの部品を取り替えた。だが検査の結果、部品に狂いのないことがわかった。

HALの機能に不審を抱いたボウマンは、彼に聞こえないように宇宙艇内でプールと意見を述べ合ったが、万能のHALは読唇術で彼らの話を読み取り、危険な反抗に出た。

HALは、再びアンテナの調整方法を指示し、宇宙艇で再び本船外に出たプール博士を、宇宙の真空の中におびき出して命綱を切ってしまった。

僚友が流れ去るのを見て、ボウマン博士はすぐ宇宙艇でそのあとを追い、マジック・ハンドで彼をつかまえて、本船内に収容しようとしたが、HALは格納庫の扉を固く閉ざして、ボウマンをも船内に入れようとしなかった。そこで、彼は非常手段を用いて船内に押し入った。船内では、冬眠中の3人も、すでに死んでいた。

ボウマンは、HALの電子頭脳室に入り、彼の哀願をきかず航行に必要な機能だけを残して他は全部停止した。今やHALは、完全に、航行用の機械となってしまった。

ただ1人生き残ったボウマンは、そのまま航行を続け、やがて、地球の1,000倍もある巨大な木星の軌道に入った時、木星が従えた数個の衛星の間に、大きな黒石板が浮いているのを発見した。

ボウマンは、宇宙艇でその方に進んで行くうち、突然、宇宙の急流にはまって押し流されるかのように、恐ろしいスピードで、大星団の中を突切り、全く違った時間と空間の次元に突入して行った。そこは、人間の知識も技術も理解力も何もかも役にたたない不思議な領域だった。また、現在の生身の人間の耐えうる限界を遙かに越えた世界だった。

ボウマンが、ふとわれに返った時、彼は、ルイ十六世時代の古風で優雅な部屋の中に立っていた。しかも不思議なことに、広いその部屋の中に、唯1人、静かに住んでいる自分自身を発見した。

そこは、地球の人間に知力と進歩を与え、ボウマンを黒石板の謎で招き寄せた、宇宙の全知全能の力が、彼のために用意したある星の上なのか、それとも彼の古巣の地球なのか、彼にもわからなかった。

その部屋は、優雅な家具や装飾にもかかわらず、実験室の檻の中のように寒々として、生気も人間くささもなかった。その中で、ボウマンは次第に老い果てて行った。そして今は、その運命のすべてを肯定するかのように、静かにベッドに横たわっていた。その傍らには、彼の生涯を象徴するかのように、宇宙艇と黒石板が立っていた。

彼は静かに手をあげ、それらに最後の挨拶をした。するとまたしても黒石板の奇跡が現われた。彼は、死の同じベッドで胎児としてよみ返った。

それは、太陽系宇宙の果てをきわめ、宇宙の絶対の力に出会った経験と知恵とを、そのままそっくり体内に貯え、そこから出発することができる一段高いレベルの人間への飛躍でもあった。

胎児は、地球を眺め、宇宙を眺めて、やがて世に出る日を、じっと待っているのだった。

文部省特選
（青年・成人）
選定（少年）

青少年映画審議会推選

「2001年宇宙の旅」に対する、わが国での反響

手塚治虫氏（動画家）

あの光の場面は、サイケデリック・アートの極致。

岡本太郎氏（画家）

人間が自分のつくったものに裏切られてゆく未来人の絶望感がよく出ている。これはいまだれも予感していることで、その予感をよくとらえている。

大宅壮一氏（評論家）

神もコンピューターも信じられなくなった人間が、なにをよりどころとするのか考えねばならない時代にはいったことを暗示している。「さまよえる人類」の時代。

（以上毎日新聞より）

石川達三氏（作家）

前略……終りの方の色彩のアラベスク、あれだけは感嘆して見ました。

福島正実氏（「SFマガジン」編集長）

SFが映画メディアによって表現しようとしていたすべてが、この映画の中にはある。

宇宙生物の一種族としての人類の、発生と進化と、宇宙への前進、高々度な他の種族との出合いが、映画によってしか表現しえない壮大なスケールとダイナミックさとで描かれている。

桂小金治氏（TV司会者）

宇宙旅行は夢でない。胸ふくらませて、でっかい宇宙の美しさにうたれました。私が初めて見る神秘の世界…。戦争!! 人間のちっぽけな争いが、全くばかばかしくなります。夢を現実化してくれた映画です。

アントニオ古賀氏（アーチスト）

木星旅行への未来図や、無限大の宇宙世界が、時空を越えて映像されていて、抽象画の美しさ、光の流れなど全てが、外国映画ならではのすばらしさです。